

創世記38-50章 「苦しみの後の栄光」

1A キリストとの歩み

2A ヨセフの生涯にあるキリストの御霊

1B 兄たちからの拒否

2B 異邦人の支配者

3B ユダヤ人たちの受け入れ

3A 主権にある罪の赦し

本文

私たちは、昨日、ルカ 24 章の二人の弟子たちの話を読みました。もう一度、24 章 26 節と 27 節を読みましょう。「26 「キリストは、必ず、そのような苦しみを受けて、それから、彼の栄光にはいるはずではなかったのですか。」27 それから、イエスは、モーセおよびすべての預言者から始めて、聖書全体の中で、ご自分について書いてある事がらを彼らに説き明かされた。」キリストは、苦しみを受けてから、それから栄光に入る。そして、そのことが聖書全体に明らかにされている、ということでした。

1A キリストとの歩み

そして私たちのキリスト者としての歩みも、このイエス様に付いていく歩みなのだということを知りたいと思います。栄光に入るはずのものが、なぜかその反対の苦しみに入ります。だから、人間的に見ると、それは神の約束が反故にされた、神がそこにおられないというように見えます。しかし、そうではなくむしろ、そこにキリストがおられ、神の不思議なご計画を遂行しておられます。「苦しみを経るからこそ、神がそれを栄光の姿に変えらえる。」という道です。神の国というものは、そういうものです。イエス様が山上の垂訓において、全く矛盾することを語られました。貧しい者が幸いである。悲しむ者が幸いである。柔和な者、あるいはへりくだる者が、多くのものを受け継ぎます。

それは、言い換えると「死ななければ、甦らない」という原則です。自分を生かすのではなく、自分に対して死ぬからこそ、キリストがそこに生きてくださいます。自分が生きていなければ、甦りの命は働きません。自分がいなくなるとき、無になる時に、そこに死なれて、葬られたキリストが、甦りの力をもって生きてくださいます。「ガラテヤ 2:20 私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。」

そこで私たちがイエス様を信じるということは、何なのかを考えてみたいと思います。それは、水のバプテスマ、洗礼にも表れていることです。キリストに結びつけられたという真理です。キリスト

が死んで葬られました。同じように、罪に支配されていた自分が死んで、葬られました。キリストが墓から甦られました。それで、私たちも将来、体の復活を待つと同時に、今の体の中にも、復活の力によって新たに生きることができるのです。(ローマ 6 章)そこで注目したい御言葉が、ピリピ 3 章 10-11 節です。「私は、キリストとその復活の力を知り、またキリストの苦しみにあずかることも知って、キリストの死と同じ状態になり、どうにかして、死者の中からの復活に達したいのです。」キリストの苦しみにあずかる、これは言い換えると、キリストが苦しまれたその交わりにあずかる、ということです。そのことによって、復活の力にもあずかることができます。キリストの御霊が私たちに住んでおられるということは、私たちはキリストの歩まれた道を、神が私たちにこしらえてくださった一つ一つの人生で、追体験をさせてくださるということなのです。

私の友人に宣教師がいますが、アメリカに私が住んでいた時、同じ神学校で学んでいた仲です。卒業間近の時に、その夫婦に初めての赤ちゃんが与えられました。カレブ君と言います。彼が育っていくのを、見ることができました。ところが、私たちが日本に戻って来てから彼が心筋症にかかったことを知らされました。幼い子の心筋症はそのまま死につながります。心臓移植をしなければいけませんが、ドナーが見つかりませんでした。彼が三歳の時です。天に召されました。そして、その葬儀のビデオを送ってきてくださいました。その葬儀には、お母さんの証しが添えられていました。カレブ君は、生命維持装置によって、あまりにも多くの管が体につながっていたそうです。それで、両親も彼を抱くことができませんでした。その、ベットにつながれたようになっている姿を見て、お母さんはイエス様の十字架を思ったそうです。十字架に付けられているキリストを思いました。そして、お父さんがカレブに、「イエス様のところに行きたいか？」と尋ねました。はっきりと、行きたいと答えました。そして、医者に延命措置をやめても良いという許諾を与え、それで彼は息を引き取りました。両親は彼の体をついに抱くことができました。「これで、自由になったね。」と言って、神をその場で賛美したそうです。

イエス様を信じて生きるということは、こういうことですね。たった三歳の子でも、主はご自分の道を歩ませるように召してくださいます。私たちも、キリストに召されるということはこういうことなのです。

2A ヨセフの生涯にあるキリストの御霊

そこで聖書全体で眺めてみたいと思います。開かなくて結構ですが、使徒の働き 7 章に、ステパノによる説教があります。彼が、旧約時代の人物として主に、ヨセフの生涯とモーセの生涯を取り上げています。そして、それぞれの生涯の中にキリストご自身の歩みを見せています。ヨセフの生涯を振り返ってみましょう。創世記 37 章を開いてみてください。どなたか、37 章の 3 節から 11 節を読んでみてください。

1B 兄たちからの拒否

37:3 イスラエルは、彼の息子たちのだれよりもヨセフを愛していた。それはヨセフが彼の年寄り子

であったからである。それで彼はヨセフに、そでつきの長服を作ってやっていた。37:4 彼の兄たちは、父が兄弟たちのだれよりも彼を愛しているのを見て、彼を憎み、彼と穏やかに話すことができなかった。37:5 あるとき、ヨセフは夢を見て、それを兄たちに告げた。すると彼らは、ますます彼を憎むようになった。37:6 ヨセフは彼らに言った。「どうか私の見たこの夢を聞いてください。37:7 見ると、私たちは畑で束をたばねていました。すると突然、私の束が立ち上がり、しかもまっすぐに立っているのです。見ると、あなたがたの束が回りに来て、私の束におじぎをしました。」37:8 兄たちは彼に言った。「おまえは私たちを治める王になろうとするのか。私たちを支配しようとも言うのか。」こうして彼らは、夢のことや、ことばのことで、彼をますます憎むようになった。37:9 ヨセフはまた、ほかの夢を見て、それを兄たちに話した。彼は、「また、私は夢を見ましたよ。見ると、太陽と月と十一の星が私を伏し拝んでいるのです。」と言った。37:10 ヨセフが父や兄たちに話したとき、父は彼をしかって言った。「おまえの見た夢は、いったい何なのだ。私や、おまえの母上、兄さんたちが、おまえのところに進み出て、地に伏しておまえを拝むとも言うのか。」37:11 兄たちは彼をねたんだが、父はこのことを心に留めていた。

彼は当時 17 歳でしたが、皆さんよりも若干年下の年代の時でした。彼は、父イスラエルから寵愛されていましたが、それが兄たちの妬みを買いました。そして、2 節にありますが、兄たちの悪いことを父に告げ口もしていたようです。こういう子は、学校のクラスでも嫌われますね。ヨセフは、長服を着せてもらっていますが、これは長子であることを示すものです。長子とは、父からの相続を二倍受け継ぐ人です。大抵、長男がその権利を持っているのですが、ヤコブとしてはラケルから生まれた子として、ヨセフにその長服を与えたのです。それが兄たちを怒らせたのです。

おまけに彼は、臆面もなく兄たちが自分の前にひれ伏す夢を彼らに話しました。また父も母も、兄たちと共に伏し拝んでいるという夢を話しました。それでさすがのイスラエル、ヤコブもそのことをたしなめたのですが、彼はこのことに心を留めていた、と言っています。

何かとても似ていると思いませんか？そうです、キリストご自身の生涯に似ています。イエス様はユダヤ人の間で生まれました。けれども、この方は絶えず、ご自身が神の独り子であることを語っておられました。神殿に入れば、そこは自分の父の家であるとすんなりと話しておられました。父とわたしは一つであると、言われました。それでユダヤ人たちは激しく妬みました。神と自分を同等に置くとは何事だとして怒ったのです。そして、イエス様がユダヤ人に捕えられて、大祭司カヤパの前で何と証言したかを思い出してください。「マルコ 14:61-62 大祭司は、さらにイエスに尋ねて言った。「あなたは、ほむべき方の子、キリストですか。」そこでイエスは言われた。「わたしは、それです。人の子が、力ある方の右の座に着き、天の雲に乗って来るのを、あなたがたは見るはずです。」」イエス様は、神に愛された独り子であること、そして天から戻って来られる王であると証言されたのです。したがって、十字架の罪状は「ユダヤ人の王」でした。

しかし、ヨセフは当然ながら、自分がキリストを示しているように用いられているなぞ、考えてもい

なかったでしょう。むしろ、ちょっと生意気な子、真面目だけれども空気が読めない子だったかもしれません。しかし、ここからが大事です。人間的には欠けのある人生です。しかし、神はその欠けの人生をもって用いてくださる、ということです。私たちは人間的に、「ヨセフはこんなことを言ったから、いけなかったのだ。兄にそんな態度で話すべきでなかった。」と批評することができると思うし、事実、そうすべきだったかもしれません。しかし、ここからが神の世界です。神は欠けのある者たちをこよなく愛され、そして選び、ご自分のものにし、用いられます。神は恵みによって、私たちを選ばれ、呼び出され、そしてキリスト者の歩みをさせてくださるのです。キリスト教の世界というのは、そのままのあなたが呼ばれ、そのままのあなたが用いられるということです。生まれつきの盲人に対して、それは親の罪か、本人の罪かと弟子が尋ねた時、「親でも本人でもない、神の栄光がこの人に現われるためだ。」ということなのです。負い目を持ちながらも、なおのこと神は私たちを立たせ、忠実な者とみなしてくださるのです。そして、主は私たちに聖化、きよめを与えてくださいます。主の愛の訓練の中で、神の御心を知り、それを選び取ることができるよう導いてくださるのです。

そして続けて読めば、ヨセフが兄によって、エジプトに向かうキャラバン、隊商に奴隷として売られる場面が出てきます。28 節ですね、「そのとき、ミデヤン人の商人が通りかかった。それで彼らはヨセフを穴から引き上げ、ヨセフを銀二十枚でイシュマエル人に売った。イシュマエル人はヨセフをエジプトへ連れて行った。」ヨセフが銀貨で売られましたが、イエス様も同じようにイスカリオテのユダが祭司長たちから銀貨を受け取ることによって、捕えられました。

2B 異邦人の支配者

しかし、主はヨセフと共におられます。この後の話は、彼が奴隷として、エジプトの王パロの廷臣であるポティファルに雇われたことです。そこで、主と共におられたので、ヨセフが祝福を受け、ポティファルの家も祝福を受けました。ポティファルは家の財産をヨセフに全て管理させるまで、彼を信頼しました。神は後のヨセフのために、このような賜物を与えておられました。管理して、治める力を与えておられました。しかし、ポティファルの妻がいっしょに寝ておくれ、と言い寄ります。ヨセフは拒否します。しかし、拒否して逃げた時、その上着をその女はつかんだので、その上着を逆の証拠として夫に使いました。ヨセフが自分を犯そうとした、と訴えたのです。

ヨセフは神を恐れしました。エジプトという異邦人の国、異教の国です。ヨセフが何をしたところで、咎められることはありません。そしてたった二人しかない所で、言い寄られたのです。そしてヨセフは二十に近い年です。性的な衝動はとても強い年頃です。しかし、神を恐れしました。けれども、神を恐れた結果、かえって彼は窮地に陥りました。ポティファルによって、その監獄に入れられたのです。私たちも同じです、神を恐れた結果、もっと窮地に立たせられることが多々あります。私たちが神に従う、キリストに従うという生活ではなく、どれだけ「元の生活に戻ったらどうなの？」というささやきをいつも聞きます。なぜなら、真面目にキリストに従おうとするならば、何か試される、困難なことがある、普通に生活していれば起こらなかったことが起こるからです。

しかし驚くべきことが、書かれています。39章 21-23節を読んでみましょう。「21 しかし、主はヨセフとともにおられ、彼に恵みを施し、監獄の長の心にかなうようにされた。22 それで監獄の長は、その監獄にいるすべての囚人をヨセフの手にゆだねた。ヨセフはそこでなされるすべてのことを管理するようになった。23 監獄の長は、ヨセフの手に任せたことについては何も干渉しなかった。それは主が彼とともにおられ、彼が何をしても、主がそれを成功させてくださったからである。」主はそこにいても、ヨセフと共におられました。ここが大事ですね、エマオに向かっていた弟子たちと同じです。主が見放されたと思っていた弟子たちのところに、主が共に歩いておられましたが、ヨセフが監獄にいる時に、主は共におられました。そして祝福してくださっています、彼に与えられた管理する賜物は、この監獄でも用いられました。

けれども、さらに苦境にヨセフは落とし入れられます。それは、「期待の手綱が切れてしまった」ということです。パロの宮廷で働いていた二人の者が同じ監獄に入りました。一人は献酌官、もう一人は調理官です。パロの食事に毒盛りがされていたことが発覚したのでしょうか。ヨセフがいつものように、彼らの様子を見ていると献酌官が夢を見たと言います。それは、一本のぶどうの木から三本のつるが出ていて、ぶどうの実がなり、それを使って、パロの杯にぶどう酒を入れたというのです。ヨセフは解き明かしました。彼は夢を見る者でしたが、解き明かすこともできる賜物が与えられていました。その三本とは三日のことを示しており、三日後に再びパロの前でぶどう酒を捧げるようになる、というのです。

そこでヨセフは、この献酌官に願うのです。自分がヘブル人の国から売られてきたものであること。ここに投獄されるようなことも、行なっていないことを訴えました。そして、そのことをパロに話してくれないか、そして私をこの牢屋から出させてくれるようお願いしてくれないか、と願いました。ところが、調理官長がさえぎって自分の見た夢を話しました。それは彼が犯人で、パロによって死刑に処せられるという解き明かしです。そして、献酌官はパロの前に立つことができました。もう一人の調理官は死刑に処せられました。しかし、彼はパロにヨセフのことを伝えなかったのです。それで何と二年、そのままにされたのです。

しかし、それは神のご計画でした。ここで大事ですね、もう一度言います、キリストは苦しみを経て、それから栄光に入られました。私たちは、キリストにあつて困難や苦しみを経て、キリストにある栄光を身につけることができます。ヨセフのように、全く自分がどこにいるのか分からない、暗闇のトンネルにいるような時があっても、それでもそこに主がおられるのです。主は、二年後の世界規模の出来事のために、ヨセフを用意しておられました。

二年後に、パロが夢を見ます。二つありましたが、後にそれがどちらも飢饉を示していることが解き明かされました。その夢を見た話し、周囲の者たちに解き明かしをしなさいと言いましたが、だれも分からなかったのです。そこで献酌官がヨセフのことを思い出します。それでヨセフが連れ出されたのです。そして彼が解き明かしをします。それは七年の豊作、そしてそれに続く七年の飢

饑です。そこでヨセフは、夢の解き明かしだけでなく、その後のエジプトの非常事態宣言に近い、この国家危機を救うための方策を話しました。七年の豊作の時に備蓄を全国的にしてくださいという勧めです。

そしてこの話を聞いた時、パロが言ったのです。41 章 38－44 節です。「41:38 そこでパロは家臣たちに言った。「神の霊の宿っているこのような人を、ほかに見つけることができようか。」41:39 パロはヨセフに言った。「神がこれらすべてのことをあなたに知らされたのであれば、あなたのように、さとくて知恵のある者はほかにいない。41:40 あなたは私の家を治めてくれ。私の民はみな、あなたの命令に従おう。私があるあなたにまさっているのは王位だけだ。」41:41 パロはなおヨセフに言った。「さあ、私はあなたにエジプト全土を支配させよう。」41:42 そこで、パロは自分の指輪を手からはずして、それをヨセフの手にはめ、亜麻布の衣服を着せ、その首に金の首飾りを掛けた。41:43 そして、自分の第二の車に彼を乗せた。そこで人々は彼の前で「ひざまずけ。」と叫んだ。こうして彼にエジプト全土を支配させた。41:44 パロはヨセフに言った。「私はパロだ。しかし、あなたの許しなくしては、エジプト中で、だれも手足を上げることもできない。」

牢獄にいた身から、一気にエジプトの総理大臣になりました。ここに、キリストの苦しみから栄光という姿が浮き彫りにされています。そこでローマ 8 章 17 節を読みます。「もし子どもであるなら、相続人でもあります。私たちがキリストと、栄光をともに受けるために苦難をともにしているなら、私たちは神の相続人であり、キリストとの共同相続人です。」キリストにある苦難を共にしているなら、栄光を共に受けるということです。神の国をキリストにあって相続するなら、その過程というのはキリストの苦しみと共にするということなのです。

そしてヨセフは、エジプトの国を治めていきます。彼はパロによって妻が与えられ、そこでマナセとエフライムを生みました。ここで一つ、大きな神のご計画に触れることとなります。それは、「**同胞によって拒まれたキリストは、異邦人の間で受け入れられる。**」という流れです。キリストがご自分の民のために来られました。イエス様はイスラエルの選ばれた方として来られました。しかし、ユダヤ人指導者の妬みを受け、拒まれ、見捨てられました。しかし、その妬みと敵対のゆえに、福音は異邦人にまで届けられることとなりました。イエス様が、ぶどう園の農夫の喩えをしたことを思い出してください。主人が送った僕たちを彼らは打ち叩きました。主人は最後に、「わたしの息子であれば敬ってくれるに違いない。」と思いましたが、彼らは、「あれはあと取りだ。さあ、あれを殺して、あれのものになるはずの財産を手に入れようではないか。(マタイ 21:38)」と言い、息子を殺してしまいました。これは彼らユダヤ人宗教指導者のことを指しています。それでイエス様が言われました。「マタイ 21:43 だから、わたしはあなたがたに言います。神の国はあなたがたから取り去られ、神の国の実を結ぶ国民に与えられます。」ユダヤ人に対して与えられた福音が、他の民族にも等しく与えられるようになりました。イエス様が、昇天される前に弟子たちに命じられたのは、「すべての国民を弟子としなさい。」というものです。

そして私たちはその時代に生きています。キリストにあつて、イスラエルの子孫ではないのに、異邦人である私たちにも福音が届けられています。これが、神の救いのご計画を、大きな視野から見た時の姿です。今、世界中に数多くの民族、数多くの国でイエスの御名が信じられているということ、このことは神がアブラハムに対して、「あらゆる国民が、あなたによって祝福される。」ということが実現しているのです。

3B ユダヤ人たちの受け入れ

しかし、神のご計画はヨセフが高い地位につくということではありませんでした。その飢饉は、エジプトだけでなく世界的なものでした。エジプトの近くにある地域にも飢饉は及びました。それで、世界中の人々が穀物をエジプトで買うようになります。そこでカナンに地に住んでいる、ヤコブの家にも一つの出来事が起こるのです。ヤコブの家にも穀物がなくなってきました。それでヤコブが息子たちに、「エジプトにいて穀物を買ってきなさい。」と命じるのです。兄たちは顔を見合わせました。しかし、兄たち十人はエジプトに下っていったのです。兄たちには、これは紛れもなく自分たちが行なったことの仕打ちを受けているという思いがありました。同じくラケルから生まれたヨセフの弟、ベニヤミンは、ヤコブは連れていかせませんでした。ヨセフと同じようなことが起こらないようにするためです。

そして次のことが起こります。「創世 42:6 ときに、ヨセフはこの国の権力者であり、この国のすべての人々に穀物を売る者であった。ヨセフの兄弟たちは来て、顔を地につけて彼を伏し拝んだ。」そうです、ヨセフが 17 歳の時に見た夢が、今、ここで実現しました。

ここで考えてみましょう。イエス様は、ユダヤ人に拒まれました。そして福音は異邦人に受け入れられました。しかし、最後には神の選ばれた民イスラエルに受け入れられるというのが、神のご計画の流れです。「ローマ 11:25-27 兄弟たち。私はあなたがたに、ぜひこの奥義を知っていただきたい。それは、あなたがたが自分で自分を賢いと思ふことがないようにするためです。その奥義とは、イスラエル人の一部がかたくなになったのは異邦人の完成のなる時までであり、こうして、イスラエルはみな救われる、ということです。こう書かれているとおりです。「救う者がシオンから出て、ヤコブから不敬虔を取り払う。これこそ、彼らに与えたわたしの契約である。それは、わたしが彼らの罪を取り除く時である。」イエス様は再び来られる時に、イスラエル人は先祖がかつて殺したイエスこそ、自分たちのメシヤ、救世主であることを悟ります。「ゼカリヤ 12:10 わたしは、ダビデの家とエルサレムの住民の上に、恵みと哀願の霊を注ぐ。彼らは、自分たちが突き刺した者、わたしを仰ぎ見、ひとり子を失って嘆くように、その者のために嘆き、初子を失って激しく泣くように、その者のために激しく泣く。」

ですから、私たちが今、どのような時に生きているかを知ることができます。世界中に福音が広まっています。今、世界中がテロリズムや戦争の惨禍が広がっていますが、キリスト者は毎年、一億人が迫害を受けていると言われています。しかし、この時ほど諸国の中で主が人々を救われて

いる時はありません。世の終わりについて、主は迫害が激しくなることを教えられましたが、御国の福音が広がることも語られました。そして終わりが来ると、マタイ24章で言われました。そしてまた、イスラエル人という人々が聖書時代の昔の人々ではなくなりました。ユダヤ人が世界中から集められ、イスラエルの国が1948年に出来上がり、そして徐々にですが、イエス様を自分の救い主として信じるユダヤ人も増えています。したがって、異邦人に対する神の救いの完成が近づいており、その後に来るイスラエルの救いも近づいているのです。

3A 主権にある罪の赦し

そしてヨセフの話に戻りますが、ヨセフはベニヤミンに対して兄がどうしているのかを確かめたく、ベニヤミンを連れてこいと命じます。そして、二度目に戻ってきた時にベニヤミンに会えました。そしてヨセフは彼らを試します。自分に対して兄たちが奴隷として自分を売る仕打ちをした。自分の弟が奴隷にされるなら、兄たちはどのように対応するだろうか？それによって彼らの心を試したのです。ベニヤミンの抱えている穀物の袋に、自分の使っている銀の杯を入れなさいと家来に言いつけました。そして、ベニヤミンが盗んだように見せかけたのです。彼らが出ていったあと、追いかけていき、ベニヤミンの袋から銀の杯が出てきました。

兄たちは、「私たちは奴隷となります。」と言いました。ヨセフは、「いや、杯が見つかった者だけで良い。」と言いました。しかし、ユダが前に出てベニヤミンのために執り成しをしたのです。父ヤコブが、ベニヤミンが戻って来なければ悲しみに沈んで死んでしまうだろう。私が保証人となったので、私が身代わりに奴隷となります、といったのです。ここに、身代わりの犠牲、キリストを見ることが出来ます。

そしてヨセフは泣きだしたのです。彼は、兄たちのした仕打ちについて、大きな神のご計画を悟ったのでした。それが創世記45章に書いてある言葉です。ヨセフは自分がヨセフであることを明かしました。5節を読んでください、「今、私をここに売ったことで心を痛めたり、怒ったりしてはなりません。神はいのちを救うために、あなたがたより先に、私を遣わしてくださったのです。」ヨセフはさらに鮮明に、父ヤコブがなくなった後に兄たちに語りました。「50:20-21 あなたがたは、私に悪を計りましたが、神はそれを、良いことのための計らいとなさいました。それはきょうのようにして、多くの人々を生かしておくためでした。ですから、もう恐れることはありません。私は、あなたがたや、あなたがたの子どもたちを養いましょう。」こうして彼は彼らを慰め、優しく語りかけた。」

これが、神がヨセフに与えておられたご計画でした。それは彼がエジプトの支配者荷なることでもなんでもなく、悪を意図した兄たちの行動を、神が家族を飢饉から救うためのものであったということです。このご計画を悟ったからこそ、彼は兄たちを完全に赦すことが出来ました。悪をも善に変えられる主は、ご自身が十字架の上でその御業を成し遂げられました。ユダヤ人の指導者たちの妬み、そこにある人々の悪はもつともどす黒いものでありました。人殺しならず、神殺しをしました。しかし、神はその悪を永遠の救いを全人類にもたらすご計画の中枢に置かれたのです。そして、

このことのために、ヨセフは立てられていました。キリストの苦しみとその後の栄光を、彼はその生涯で証したのです。

私たちキリスト者として生きる時、ヨセフの生涯から何を学ぶことができるか、知っていく必要があるでしょう。一つに神の御手の中にある人生なのだということを見る必要がありますね。どんなことがあっても、それが悪であっても、神はその悪をもご計画の中に入れておられるということ。そして、その計画は善をもたらすものであるということです。そしてもう一つは、それゆえに私たちは人を赦すように召されているということです。悪に対して善で報いるように召されています。「ローマ 12:21 悪に負けてはいけません。かえって、善をもって悪に打ち勝ちなさい。」これは何も、自分が直接、悪いことをされたということに限りません。この世にある悪や不条理があります。それに対して、私たちが怒りや憎しみ、苛立ちや絶望、あるいは無気力、無感覚になって、愛というものを忘れたら、それは悪に対して敗北したことになります。キリストにあって、すべてのことに感謝し、喜び、祈り、暗い世だからこそ、光ととして輝くことも、善をもって悪に打ち勝つことです。